

一時保育施設「首都大KIDS」をご利用ください

首都大学東京では、南大沢キャンパス近くで一時保育施設「首都大 KIDS」を運営しています。今回は、日ごろの様子や首都大KIDSの特徴などについて、保育士の先生にお話をうかがいました。利用を検討されている方や、これから子育てを考えている皆さんの参考になれば幸いです。

明るく出迎えてくださったのは、施設長の吉池先生。この日は夏真っ盛りでしたが、私たちが訪れたのは、ちょうどベランダにビニールプールを出して水遊びをはじめようとしているタイミングでした。午前中は1時間ほどを遊びや季節に合わせた制作の時間にあてているということです。この日のように水遊びをしたり、近くの公園までお出かけをしたりするほか、雨の日でも体を動かして遊びたい子どものために室内遊具も用意していますので、いつでも楽しく遊ぶことができます。また、先生の弾く電子ピアノに合わせてのリトミックも人気があるそうです。子どもたちのノリの良さに、先生たちも次々と新しい曲をマスターしていると言います。

室内を見渡してみると、季節に合わせた飾りが目を楽しませてくれます。子どもたちがいつ来ても楽しむことができるようにと、先生方がアイデアを出し合いながら、手作りで作っているそうです。この日は夏に合わせて作られたかき氷の飾りが新しくお目見えしました。また、おもちゃも既製品だけではなく、ペットボトルを使ったスノードームなど、先生の手作りおもちゃがたくさん揃えられています。吉池先生によれば、先生方は子どもたちに通常の保育園と同じレベルの体験をしてもらえようようにしたい、喜んでもらいたいという思いが強くあって、いろいろな工夫を重ねているということでした。

首都大KIDSの特徴は、少人数であるがゆえに一人ひとりに目配りが行き届き、それぞれのニーズに応じた対応がとりやすいという点

にあります。例えば公園に行くときでも、まだ体力がじゅうぶんではない子どもの時にはすぐ近くの広場を、体を動かすのが好きな子どもの時には遊具がたくさんある公園を、というように、その日の子どもの状況に応じて行先を選ぶなどの工夫をしているそうです。また、子どもたちのお昼寝についても、基本的な時間は決まっているものの、登園・退園の時間など、それぞれの状況に合わせて時間を調整することもあるといいます。どのような場合でも、保護者としてしっかりコミュニケーションを取りながら、その時々で最もふさわしい対応ができるよう、気を配っていることがうかがえます。

吉池先生は、最近では父親が送迎を担当するケースも目立つようになったと言います。その際に、家でのお子さんの様子などを聞くと、詳しくお話ししてくれるお父さんが多いことから、首都大KIDSを利用されているお父さんは、ただ「お手伝い」程度に育児にかかわるのではなく、パートナーと協力しながら主体的に育児にかかわっている方が多いのではないかと話されていました。

首都大KIDSでは、保育施設で大切な、セキュリティ面についてもしっかりと対策を講じています。地震、火災、不審者の侵入など、様々な条件を想定した避難訓練を、毎月実施しています。もちろん、ヘルメットや防災用品も完備していますので、十分な体制を整えています。それ以上に、各先生方が普段から防災への心構えをしていますので、安心してお子さんを預けることができます。

首都大学東京の教員、職員、学生が利用することのできる首都大KIDS。この春に卒業された、大学院生の利用者が「ここがあったから卒業することができた」と言っていたそうです。子育てしながら学び働く首都大のみなさんにとって、少しでも力になれば。子どもたちに喜んでもらえたら。そんな思いを持ちながら、今日も首都大KIDSの先生方は子どもたちと向き合っています。



お話をうかがった、吉池恵己先生(右)、大和田恭子先生(左)、ありがとうございました!!




\* 首都大KIDSの利用にあたっては、登録が必要となります。


詳しくはWebサイト (<http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/>) をご覧いただくか、ダイバーシティ推進室にお問い合わせください。

見学会 & 子育て情報交換会

— 来て、見て、話そう、子育てのこと — 8月1日(水)



施設長の吉池先生からの説明を受けながら、保育が行われている様子を見学しました。質問も活発に飛び交い、首都大KIDSの様子をよく知る機会になりました。



その後、学内に場所を移して、女性の健康相談を担当されている岡本先生、長濱先生との情報交換会を行いました。お子さん連れでの参加もあり、和やかな雰囲気となりました。

南大沢キャンパス図書館本館の入口からダイバーシティ推進室入口まで点字ブロックが敷設されました。また、階段のラインや点字ブロックの補修など、障がいのある学生の要望で、施設改修がされています。



ダイバーシティ推進室入口

首都大学東京 ダイバーシティ推進室  
〒192-0397東京都八王子市南大沢1-1 図書館本館1階  
電話：042-677-1337(直通) / 内線2571 FAX：042-677-1355  
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp  
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/  
発行日：2018年8月31日

編集・発行

2018年度第1回バリアフリー講習会

発達障がいのことを知ろう



はじめに

2018年5月28日(月) 図書館本館 プレゼンテーションルームにて、2018年度第1回バリアフリー講習会「発達障がいのことを知ろう」を開催しました。

「発達障がい」について、言葉は

知っていても具体的には分からないことが多いのではないのでしょうか。そのため、本講習会では発達障がいの基礎的な理解を目指し、講師に臨床心理士として明星大学で発達障がい学生支援に取り組んでいる工藤陽介氏をお招きしました。工藤氏は発達障がいの特徴や対応例を紹介し、受講者はワークショップやディスカッションを交えながら理解しました。なお、本講習会は本学学生相談室と共催で開催し、開催にあたり学生相談室より挨拶をいたしました。

発達障がいの特徴について

①自閉スペクトラム症(ASD Autism Spectrum Disorder)  
社会的コミュニケーションの苦しさ、こだわりといった特徴があり、社会的かつ情緒的な関係構築が難しい傾向があるといえます。対応の際は本人のニーズを引き出し、具体的に伝えることを心がけるそうです。

②注意欠如多動症

(ADHD Attention Deficit Hyperactivity Disorder)  
「衝動性」、「多動性」や「不注意」が代表的な特徴として挙げられます。大学生活では遅刻、期限が守れない、忘れ物が多い等の困難がみられるといえます。スマホのリマインダー機能を活用するなど、本人が記録を残し、周囲が改めてスケジュールを確認する等の工夫が有効なことがあります。

③局局性学習症(SLD Specific Learning Disorder)

読み、書き、計算、など特定の作業が極端に苦手なため、学校生活に困難が生じやすい傾向があります。大学生活では、苦しい作業を他の作業に変更できるか、または、作業を補助する機器が有効かなどを検討する必要があります。

疑似体験とまとめ

これらの特徴を簡易的なワークショップで疑似体験し、体験した困難についてグループで意見交換をしました。「指示が適切でないと困難の度合いが高くなる」、「条件が変わると簡単な作業でも困難を感じる」等、様々な意見が出されました。このように発達障がいの困難や対応方法は状況によって変化し、一様ではないといえます。工藤氏は、「学生本人と関係者が試行錯誤し、インプット・アウトプット方法の代替や変更が可能か、共に検討することが求められる。関係者が連携して取り組んでほしい」とまとめました。

感想

「発達障がいについて知ってはいしたが、具体的な支援策は知らなかったのでもっと勉強になった」(職員)、「個人ワーク、グループワークが多くなったためになりました。学生だけでなく、職員や教員など様々な意見を聞くことができ、楽しかったです。他の人がいい意見を持っていました」(学生)、「大変分かりやすく、自分もそうかもしれない、と思った学生もいると思う。どこに相談したらよいかも教えてもらえたら尚良かった」(教員)。

合理的配慮の提供の出発点は、「本人の困り感」にあると考えていますが、出発点を共有するためにも障がいの特徴を理解することは欠かせません。学生との建設的な対話や関係者の連携の在り方など、本講習会を今後の障がい学生支援に活かしていきたいと考えております。



## ノートテイク講習会 ノートテイク(手書き要約筆記)・パソコンノートテイク(パソコン要約筆記)

本学では昨年度より、パソコンノートテイクを中心とした聴覚障がい学生支援に取り組んでおり、今年度も支援スタッフの募集と養成活動に取り組んでおります。今年度の新たな試みとして「ノートテイク講習会(手書き)」、「パソコンノートテイク講習会」の講師役を先輩支援スタッフが担いました。また、後期より聴覚障がい学生が日野キャンパスで授業を受けることから、日野キャンパスでパソコンノートテイク講習会を開催しました。

「ノートテイク講習会」では、映像による聴覚障がいの疑似体験を行い、その後ノートテイクの基本的な考え方や技術を学びます。支援実習では、手書きでサポートすることが多い定期試験の際の支援体験を行いました。参加者からは要約しながら書くことの難しさや、聴こえない状況では文字情報がいかに重要であるかを実感した、などの意見が出ました。

「パソコンノートテイク講習会」では、基本的な技術を学んだ後に、様々な支援実習を体験し、最後は2人で連携して文章を作成する「連携入力」を行いました。パソコンを用いることで情報量は増えますが、一方でパートナーと息を合わせるために、経験を積む必要を実感したようです。これらの講習会を受講し、支援見学・体験を経て実際の支援を行います。

今年度も多くの学生が参加し、現在の支援スタッフは約90名となりました。5、6月からは新支援スタッフが先輩支援スタッフのサポートを受けながら、授業での支援を行っております。

このように、支援スタッフの養成に学生が関わることにより、昨年度以上に学生が中心となった支援活動を展開できるようになりました。また、講習会には聴覚障がい学生も積極的に関わり、自身の障がいやニーズを伝える機会を作っております。

これからも障がい学生のニーズを中心に支援スタッフ、関係者が協力し、より良い支援体制の構築を目指します。支援スタッフの活動に興味のある方は、お気軽にご連絡ください。



ノートテイク講習会



パソコンノートテイク講習会

## 手話講習会 初級・教職員向け

本学の手話講習会は2002年度より開始し、昨年度から通年で開催しております。今年度は、前期に学生対象の全8回の初級講習会(28名受講)と開催希望の多かった教職員対象の手話講習会(13名受講)を1回、開催しました。

学生対象の講習会では指文字と挨拶、数字、家族などの基本的な手話表現を学び、会話練習を行いました。当初はぎこちない手話の受講生も、講習が進むにつれてスムーズになり、最終回のろう者との交流会では、覚えた手話を駆使して会話する様子が見られました。

教職員対象の講習会では、参加者の名前と所属の単語を中心に自己紹介や窓口対応で使える手話表現を学びました。本学の聴覚障がい学生も開催に協力し、大学で使う手話表現を紹介しました。

後期は学生向けに中級の講習会を開催し、教職員向けの講習会は日野キャンパスでの開催を予定しております。また、11月18日には聴覚障がいに関する総合イベント「Tokyoみみカレッジ」(主催:東京都、会場:首都大学東京南大沢キャンパス)を開催します。

聴覚障がい学生支援に取り組む始めて1年半になりますが、キャンパス内で手話を使って会話する様子が見られるようになりました。学内に定着させるとともに、学外へも手話を広めていきたいと考えております。

以下、受講生の感想を紹介します。

「初めはすごく緊張しましたが、講師の方々がとても優しく楽しく教えて下さったおかげで、もっと手話ができるようになりたい!と意欲が高くなりました。もっと早いうちから手話を学びたかったです」(学生)

「とても有意義な時間でした。難しかったですが、初めて手話を経験し、意義深さと面白さを実感しました。日常の中で手話を実践していきたいと思えます」(教職員)



初級手話講習会



教職員向け手話講習会



初級手話講習会交流会

## ランチタイムレクチャー・ダイバーシティミニレクチャー 「ダイバーシティって、なんだろう?」

休み時間に昼食をとりながら、気軽な雰囲気の中でダイバーシティについて学ぶことのできる「ランチタイムレクチャー」。2年目を迎えた今年度は、ダイバーシティ推進室特任研究員によるレクチャーと、参加者同士のディスカッションを組み合わせを行いました。障がいのある構成員支援に関する回では、本学の聴講生で、多摩市で障がいのある方の自立支援を行っている、自立ステーションつばさのメンバーによるゲスト講演も行われるなど、一方的に教え一教えられるという関係だけではなく、参加者が相互に学び合う取組みも行うことができました。

また、今回は聴覚障がいのある学生支援の一つとして、UD Talkという音声認識のシステムを用いた支援を試験的に実施しました。これは、専用のマイクが拾った音声を文字化してiPadなどのデバイスに表示し、利用者がその画面を手元で見て、授業の内容を把握するというものです。明瞭に発音するなど、話し方に多少の配慮をすれば、非常に高い認識率を示すことが確認されましたが、一方で専門用語や、日本語と外国語が入り混じった場合には認識率が低くなるなど、成果と課題を見出すことにもつながりました。

参加者からは、「当事者の話、率直な意見を多く聞けた。対等な話し合いが実現できた。」「首都大における障がい者支援、セクシュアリティに対する配慮の在り方などが詳しく知れてよかった。」などの声が寄せられたほか、「もっと回数を増やして欲しい。」「障がい学生本人がどのように学校生活を送っているか、どのような支援を受けているのか、よければ当事者の話を聞いてみたいです。」「医療現場のジェンダーについて知りたい。」などの要望も寄せられ、今後への期待感も示されました。

さらに、今回は新しい試みとして、来年度以降に障がいのある学生が通学する可能性のある日野、荒川の両キャンパスでも3回のレクチャーを実施しました。参加者は南大沢ほど多くはありませんでした。今後は、両キャンパスでもダイバーシティ推進の機運を醸成するための基盤づくりを続けていく予定です。



## ダイバーシティ推進事業紹介「あなたの個性が生きる未来へ」

7月15日(日)、8月18日(土)の2日間、首都大学東京の大学説明会が開催されました。ダイバーシティ推進室では、ダイバーシティ推進室の認知度向上と、活動への理解促進を目指し、受験生の関心も踏まえて、「障がいのある学生支援」「理系女子のキャリアパス」「セクシュアル・マイノリティの理解」の3点を紹介しました。

「障がいのある学生支援」ゾーンでは、視覚障がい、聴覚障がいそれぞれの学生への支援内容や、支援スタッフの活動内容をまとめたポスターや、南大沢キャンパスの触地図を展示したほか、視覚障がい学生が使用している点字ディスプレイやスクリーンリーダー、聴覚障がい学生が使用しているUD Talkなどの支援機器を体験してもらうコーナーも開設しました。「理系女子のキャリアパス」ゾーンでは、理工系に進学する女性を増やす取組みの必要性を、データに基づいて説明するポスターを展示するとともに、進路選択のための情報提供の一つとして、本学の理工系学部・研究科の女子学生の就職状況を示したポスターを展示しました。「セクシュアル・マイノリティの理解」ゾーンでは、基礎知識を解説したポスターと、本学における理解・啓発、および当事者支援に関する取組み内容をまとめたポスターを展示しました。フロア中央の

スペースでは、支援スタッフが制作したダイバーシティ推進室の紹介動画を放映したほか、支援スタッフによる座談会も行い、首都大に進学した理由や支援スタッフに応募したきっかけなど、高校生や保護者に首都大の学生を身近に感じていただけるような話を繰り広げました。

参加者からは、「支援機器に触れるのが初めてで、有用性が理解できた」「大学生を理解し相談できる場所、先生がいるのは心強い」など、好意的な感想が多数寄せられました。また、説明にあたった支援スタッフの姿勢に感銘を受けた方も多くいたようで、「この大学に通えたら絶対にスタッフになりたいと思いました」という声もいただくことができ、私たちとしても、たいへん励みになりました。



健康福祉学部理学療法学科1年 渡辺麻姫



新入生ガイダンス

「気兼ねせずに依頼できる、ダイバーシティ推進室の良さ」  
私が障がい学生の立場から良いと考えるダイバーシティ推進室の機能は、支援スタッフの活動が有償ボランティアだということです。まず私の障がいや支援について紹介し、良いと思う理由を説明します。  
私には視覚障がい(弱視)があります。視力は0.1弱で遠くのものや小さい文字が見えづらいので、補助員を使って補います。しかし、補いきれず授業についていけないこともあるので、その場合にはダイバーシティ推進室に支援を依頼します。例えば、画像を多く使用する授業では、先生の説明に「ここなどの指示語が多く、示している場所が見えないために何を解説しているのか理解できないことがあります。そこで、支援スタッフに横についてもらい、手元のレジュームにある画像で何を説明しているのか教えてもらっています。

このように、大学生活に支援は必須ですが、支援をお願いする立場では、「私のために多くの人に手間と時間をかけさせるのは申し訳ない」と思ってしまうかもしれません。しかし、スタッフが支援することで報酬を得られるならば、支援を受ける際に気持ちが悪くありません。多くの他大学では支援は無償ボランティアだと聞きますが、本学では有償で遠慮せず依頼できるのでとてもありがたいです。今後も気兼ねせず困ったことは声に出し充実した大学生活を送りたいです。

テレビや新聞雑誌などにおいて、スポーツは、様々な形で登場しますが、その取り上げられ方に、ジェンダー・バイアス性別による偏りや差異が生じることがあります。ジェンダー研究の文脈においては、スポーツ選手が「男性・タレント」として用いられる場合、男性はスポーツをする主体として、力強さやたくましさを表す存在として用いられがちなのに対し、女性はスポーツを見る・応援する存在として、または商品やサービスのアイコンとして用いられがちであるといった指摘がなされてきました。しかし近年では、各種メディアでの表現は多様化しています。たとえば、サッカー女子日本代表選手が空港で架空のボールを男の子にパスする設定のCM「チャレンジャーJAL」などで、ジャパン編(2015年)のように、女性アスリートが「世界と戦う存在」や「次世代の目標」として描かれるケースも増えており、一概に男性だからこつ、女性だからこつと分かれているわけではありません。ジェンダー研究もこうした変化を踏まえながら、より広い視野で「ひとつの表現を分析していく必要があるでしょう。」  
その一方で、藤山(2016)の調査(\*)によれば、地上波テレビで中継されたスポーツ競技の放送時間を性別に見ると、男性のみの競技の中継が57%、男女両方の競技の中継が33.8%、女性のみの競技の中継が8%となっており、日本のテレビにおけるスポーツ中継は、男性のスポーツが大部分を占めていることが示されています。こうしたスポーツ中継時間の男女差は、「スポーツは男性のもの」というイメージを生み出す可能性もあります。そうならないよう、メディアの送り手はその表現方法などに工夫や配慮をする必要があると言えるでしょう。

\*1…藤山新(2016)「スポーツメディアのまなざし」日本スポーツとジェンダー学会編「データでみるスポーツとジェンダー」八千代出版、P120-123、2015年11月29日(日)～12月5日(土)の1週間を集計